

図書館企画展示

清盛・元就と宮島一名誉教授菅原範夫先生
収集近世資料を読み解くー

宮島学センターでは、平成21年の開所以来、毎年夏期に広島キャンパス図書館で企画展示をおこなっています。9回目となった今年のテーマは「清盛・元就と宮島一名誉教授菅原範夫先生収集近世資料を読み解くー」（開催期間：平成29年8月21日～9月28日）でした。



菅原範夫名誉教授のご専門は国語学で、本学にご在職中は「毛利元就文書の基礎的研究ー日本史と国語・国文学の共同研究の試みー」の研究チームにも参加され、毛利家文書に見る地域言語の分析などもおこなわれました。近年は近世・近代の絵図や絵はがき、古典籍などを中心とする宮島関係資料を収集しておられます。

資料の中には、平家の栄華と没落を描いた軍記物語『平家物語』に挿絵を付した『平家物語図会』〈文政12年(1829)〉や『源平盛衰記図会』〈寛政12年(1800)〉、明治期の人々が抱く元就像を象徴的に描いている「教導立志基 毛利松寿丸」など、清盛・元就に関連した作品も含まれています。



「教導立志基 毛利松寿丸」

今年度も学芸員の資格取得を目指し、「博物館展示論」を履修する学生15名が企画展示の準備を担当しました。

準備は、まずコレクションの中から展示のテーマに沿った作品を選び出すことから始まりました。

15台の展示ケースにバランスよく資料が収まるよう、錦絵や古典籍、絵はがきなど約40点を選び、近世・近代の作品に見られる平清盛像や毛利元就像を紹介し、清盛や元就が宮島に残した逸話などを紹介しました。

また、平成28年度に購入した「小早川隆景書状（渡辺出雲守宛）」も初公開し、厳島合戦直前の緊迫した軍事情勢について紹介しました。

期間中におこなったギャラリートーク（展示解説）には、延べ65名の方にご来場いただきました。キャプション（解説文）だけでは伝えきれなかった資料の魅力や、自分たちの言葉で、直接お伝えすることができました。



参加した学生からは次のような感想が得られました。

展示ケースの限られたスペースと短い準備期間の中で、調べたことや伝えたいことを分かりやすく的確に伝えることが難しかったのですが、資料の選定からチラシ、キャプションの作成、展示作業、ギャラリートークまで、最後まで全力で取り組むことができました。来場者の方に協力していただいたアンケートの中には、「清盛と元就の厳島信仰について、信仰の目的・寄進の内容の違いなどを資料ではっきり見ることができた」というコメントもあり、自分たちの展示が宮島や地域の方の役に立っているのだと実感することができました。

(M. U レポートより抜粋)

**図書館企画展示の関連公開講座
平清盛と毛利元就－虚像と実像を見極める－**

図書館企画展示「清盛・元就と宮島一名誉教授菅原範夫先生収集近世資料を読み解く」の展示期間中に、公開講座「平清盛と毛利元就－虚像と実像を見極める－」を開催し、約170名の方にご来場いただきました。

まず、下向井龍彦広島大学大学院教育学研究科教授が「平清盛と音戸瀬戸－伝説と史実の間－」と題してご講演くださり、続いて本学人間文化学部の秋山伸隆教授が「毛利元就と厳島合戦－軍記物と史実の間－」と題して、弘治元年(1555)厳島合戦直前の呉・音戸瀬戸周辺の状況を知らせる「小早川隆景書状」(渡辺出雲守宛)などを紹介しました。

また、講座の最後には、講師による対談をおこないました。歴史の研究において、どのように史実と虚構を見極めていくかなど、意見が交わされました。



**平成29年度
「地域文化学(宮島学)」**

平成29年度の「地域文化学(宮島学)」は、日本史、日本文化史、日本文学、考古学、中国文学などを専門とする教員が担当しました。国際文化学科2年生を中心に42名の学生が受講しました。

講義		
4/10	「地域文化学(宮島学)」について	大知 徳子
4/17	厳島神社と石見銀山	秋山 伸隆
4/24	宮島における戦争と平和	秋山 伸隆
5/15	平家納経の世界	西本 寮子
5/22	平清盛の経済施策と厳島神社	鈴木 康之
5/29	宮島にもたらされた陶磁器	鈴木 康之
6/5	厳島八景の成立と京の人々	柳川 順子
6/12	厳島神社の内侍	大知 徳子
6/19	厳島八景の成立と宮島を訪れた人々	柳川 順子
6/26	広島城下の商家・保田忠昌と厳島	西本 寮子
7/3	宮島と江戸文化①	高松 亮太
7/10	宮島と江戸文化②	高松 亮太
7/24	大聖院蔵「厳島図屏風」からみる宮島の人々	大知 徳子

フィールドワーク		
5/21	室浜砲台の調査	秋山 伸隆
5/21	清盛塚の調査	鈴木 康之
5/21	歌碑・句碑の調査	西本 寮子
8/8	管絃祭フィールドワーク	大知 徳子

5月21日におこなった宮島でのフィールドワークでは、学生が3グループに分かれ、各テーマに沿った調査をおこないました。

①室浜砲台の調査

秋山伸隆教授の指導のもと、学生たちは宮島棧橋から約1時間かけて室浜砲台跡まで散策し、宮島の歴史とともに、明治期の要塞建築について学びました。



②清盛塚の調査

鈴木康之教授の指導のもと、厳島神社の西にある「経尾経塚」の調査をおこないました。学生たちは、経尾経塚の立地の特徴(地形・標高などの地理学的な視点のほか、瀬戸内海や宮島、厳島神社社殿など周辺の景観との関連性なども含む)を検討し、この場所に経塚が造営された背景について学びました。



③歌碑・句碑の調査

西本寮子教授の指導のもと、宮島島内にある歌碑・句碑・詩碑のうち3箇所をめぐり、刻まれている文字を書き留め、解説しました。また、学生たちは、この日訪れた場所で短歌を一首詠み、批評しあいました。写真は御笠濱にある碑文を、変体仮名の解説に苦労しながら調査しているところです。



平成29年度公開講座・講演会

宮島学センター公開講座・公開講演会

廿日市市教育委員会・廿日市市生涯学習推進本部と共催
第1回

9月20日「和歌・俳諧のなかの宮島」

講師：高松亮太（本学専任講師）

会場：国民宿舍みやじま杜の宿

受講者数：66名



第2回

11月15日「西行の厳島神社参詣と菩提心一弥山の
覚鑊^{かくばん}伝承を手掛かりに一」

講演：松井輝昭（本学名誉教授）

会場：国民宿舍みやじま杜の宿

受講者数：95名

第3回 宮島学センター公開講演会として開催

平成30年3月10日「戦国期厳島の町と屋敷」

会場：はつかいち文化ホールさくらびあ

講師：秋山伸隆（本学教授）

宮島観光学入門（英語）

平成28年度まで特別講座として実施していた「宮島観光英語ボランティアガイド講座」が、今年度から全学共通教育の正規科目「宮島観光学入門（英語）」（1年後期）になりました。

10月1日より授業が始まり、国際文化学科の1年生を中心とする13名の学生が、外部講師のリチャード・ウェバー先生から宮島の歴史や文化について学びました。

初回の授業では、平成27年度に「宮島観光英語ボランティアガイド講座」を受講した国際文化学科3年生の三浦彩音さんが、宮島に関するクイズ



をまじえながら、後輩たちに助言しました。

11月5日には、宮島でガイド練習をおこないました。学生たちはウェバー先生のガイドを参考にしながら、宮島の歴史や文化だけではなく、英語でコミュニケーションをとる方法も学びました。

厳島神社の石鳥居から神社出口まで案内できるよう、学生同士で協力しながら練習することができ、本番のガイドにむけて、よい機会となりました。



手水の方法を英語で解説する練習をしているところ

バーチャルガイド練習会

11月19日には、これまで学んだことをもとにして、教室のスクリーンに宮島の写真を投影し、バーチャルガイド練習会をおこないました。外国人観光客への声のかけ方や、アイコンタクトなどコミュニケーションを取る方法も学びました。



宮島でのガイド実践

11月26日、学生は3つのグループにわかれ、ガイド実践をおこないました。宮島の商店街の出口付近、石鳥居の前で待機し、訪れた外国人観光客に声をかけ、厳島神社出口まで英語で案内しました。

この日は、アメリカ、オーストラリア、カナダ、ドイツ、フランスの観光客を案内しました。

「宮島の鹿はどこから来たのか？」「狛犬は、なぜ玉の上に乗っているのか？乗っていない狛犬もいるが、なぜなのか？」といった、学生にとっては想定外の質問もありました。知っていることを伝えるだけでは通用しないことに気づき、さらに学びを深めるためのよい経験になりました。



参加した学生の感想

将来通訳になりたいという夢があるので、教室で講義を受けるよりも、宮島という場所で、直接外国人とふれあい、生の体験をすることが私にとって重要であると考え、この授業を受講しました。通常では考えられないような貴重な経験ができ、とても充実した二ヶ月間を過ごすことができました。授業を受講するまでは、宮島についてほとんど知識がなかったので、宮島をガイドする、しかも英語でということが、どれほど大変なのか、自覚を持つことができました。また、実際のガイドでは申し出を断られることもあり、笑顔で話しかけても相手にはよく伝わらないこともあるということを感じ、国際交流の難しさを経験することができました。ただ説明をし、情報を伝えるということではなく、コミュニケーションをとることが大切であり、自分だけが満足するのではなく、相手を満足させることがガイドの仕事であるということも理解できました。この授業では、広島県民として、拙いながらもガイドができるほどに宮島に関することを学ぶことができ、この大学に来てよかったと思えました。(M.E レポートより抜粋)

オーストラリア・キーンズランド州 STEM研修への協力

12月5日、広島県教育委員会事務局教育部学びの変革推進課からの依頼を受けて、オーストラリア・キーンズランド州の高校生13名が参加する研修(STEM)に協力しました。

本研修は、キーンズランド州政府教育省と広島県教育委員会の共同プロジェクトとして実施されたものです。12月3日から1週間広島に滞在した高校生たちは、宮島のほか、マツダミュージアム、平和公園などを見学しました。

12月5日の宮島見学では、「宮島観光学入門(英語)」を履修した2名の学生(国際文化学科1年 生野克海さん、尾本莉子さん)が、英語で案内しました。

11月のガイドと同様に、学生たちは石鳥居から巖島神社の出口付近まで案内しました。年の近い高校生たちとの交流を楽しみながら、宮島の魅力を伝えることができました。



高校生たちに手水の作法を説明しているところ

全国巖島神社参詣記⑨

秋山 伸隆

巖島神社

住所：山口市宮島町1番1号

山口市には「宮島町」と「巖島神社」がある。JR山口駅を降りて左へ進み、二つ目の交差点を左に折れると、そこは江戸時代の萩往還の道筋と重なる。山口線の鱒石踏切を渡り、更に進むと樫野川にかかる鱒石橋があり、橋を渡ると「宮島町」となる。山口駅から徒歩10分ほどの距離である。もとは山口市大内御堀の一部で、昭和43年(1968)から現在の町名となった。町名の由来は、ここに巖島神社があることによる。

巖島神社は象頭山の麓に鎮座している。鱒石橋を渡って直ぐ左手である。巖島神社は、応永13年(1406)大内盛見が安芸国から勧請して、上宇野令(現在の山口県庁の敷地)に祀られていた。ところが、幕末の元治元年(1864)、藩庁が萩から上宇野令に移転したため、巖島神社の宝殿は現在地に移されたと伝えられる。

もっとも江戸時代に編さんされた『防長寺社由来』第三巻によれば、上宇野令の「巖島社」とは別に、寛保3年(1743)の時点で御堀村にも「巖島大明神」がある。つまり、巖島神社の宝殿は、上宇野令の「巖島社」から御堀村の「巖島大明神」に移されたと考えることもできそうだ。

この巖島神社の宝殿は、高さ約1.3メートル、檜造りの多宝塔である。下層の軒の部分を上層の高欄付き廻縁に置き換えるという珍しいものである。宝殿は本殿の中にあるので拝観することはできない。ただし、宝殿は「巖島神社多宝塔」として山口市の文化財に指定されている。山口市のウェブサイトの「山口市指定文化財について」のページから「山口市指定文化財概要 建築物」に進むと、写真と概要が掲載されているのでご覧いただきたい。(秋山伸隆)



研究余録⑨

和歌のなかの厳島神社

干潮時に大鳥居を足元から眺めることは、今日宮島観光のハイライトの1つとなっています。ところが、こうした様子が文献に描かれるようになるのは、江戸時代後期に岡田清が編纂した『芸州厳島図会』(天保13年〈1842〉刊)を待たねばなりませんでした。それ以前からこうした楽しみ方もあったのですが、少なくとも文学作品や紀行文に描かれたり、和歌に詠まれたりすることはありませんでした。では昔の人々は、厳島神社のどのような姿を書き留めてきたのでしょうか。和歌をヒントに考えてみましょう。

『芸州厳島図会』巻一
(天保13年〈1842〉)

厳島神社を訪れる人々が何よりも魅了されたのは、海に浮かぶ大鳥居の佇まいであり、また潮の満ちた社殿の様子でした。これまた、現在でも我々を惹き付ける厳島神社の姿と変わりはありませんが、満ちくる潮の捉え方は、今と必ずしも同じではありません。

みな人の願ひを満つる潮なれば残れる磯も見
えぬなりけり 平経盛(『経盛集』)

「満つる」には「願ひを満つる」と「満つる潮」という二つの意味が掛けられています。満ちてくる潮は、あらゆる人々の願ひを満たしてくれる厳島神社の恵みの深さを象徴するものとして捉えられていたのです。遙かに時代が下った江戸時代でも同様に、

いつくしま満くるしほのいやましに深き恵み
の神ぞ祈らん 似雲(『としなみ草』)

などと詠まれており、昔の歌人たちの多くが抱いていた認識でもあったようです。次の歌は厳島八景の1つ「厳島明灯」を詠んだ歌です。

宮嶋の神のめぐみも満つ塩に見えて影そふ百
の灯 乙部可寛(『厳島八景』)

潮の満ちた夜、鉄灯籠の灯が海水に映っている幻想的な景色が詠まれています。ここでも「満」は上下に掛かります。このようにして、古人は満ち

た潮と満願とを重ね合わせながら、厳島神社への尊崇の念を表現してきたのでした。

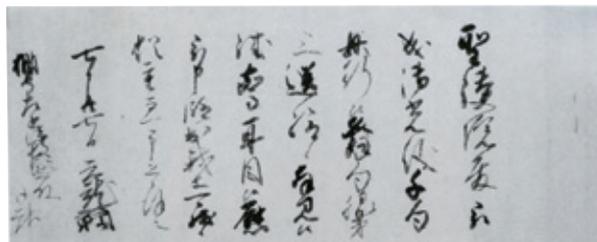
ところで、幻想的な厳島神社の夜といえば、次のような景色もよく歌に詠まれます。

さすしほに光をそへて島の名の宮居涼しき夏
の夜の月 似雲(『としなみ草』)

古人の目を通して厳島神社を味わうのも、また一興かもしれません。(高松亮太)

資料紹介 毛利元就書状

今年度新たに収集した古文書を紹介します。



毛利元就書状(棚守左近衛将監宛、宮島学センター蔵)

聖護院殿被
成御光儀千句
興行候、発句脇第
三送給候、拜見候、
誠驚耳目候、慰
被申段於我等可然候、
猶重而申可候、恐々謹言
七月廿七日 元就(花押)
棚守左近衛将監殿
御報

毛利元就が厳島神社の神職棚守左近衛将監(房ふさ頭あき)に宛てた書状です。房頭は毛利元就と同時代を生き、元就の厳島信仰を引き出したとされる人物です。

書状からは、近衛尚通の子で將軍足利義輝の叔父にあたる聖護院道増このえなおみちが「御光儀」すなわち厳島あしがよしてるを訪れたことしょうごいんどうぞうにともない、厳島で千の句をつなげて詠む「千句(連歌会)」を興行したことがわかります。

厳島神社では、菅原道真を御祭神とする天神社が建立される前後から、千句や万句の連歌会をたびたび興行していました。房頭は、連歌会が催されるたびに、毛利家の当主に発句(第1句)・脇(第2句)・第三(第3句)を届けています。

本書状でも、房頭は「発句・脇・第三」を元就に届けており、元就は「誠に耳目を驚かせ候」とその出来栄えのよさを喜んだことが読み取れます。

聖護院道増(1508～1571)は將軍足利義輝の使

者として、各地の大名のもとへ赴いており、永禄年間(1558～1570)には、毛利氏と尼子氏・大友氏との講和を斡旋するため、たびたび中国地方にも下向したことが知られています。安芸国に下向する際には宮島に逗留することもあり、そのたびに毛利氏の依頼を受けた房頭が歓待しました。本資料のように、道増の来島を受けて千句を興行したことを示す資料は、これまで他に1通しか知られておらず、宮島学の研究を進める上で貴重な資料であるといえます。

平成29年度重点事業

宮島学センター所蔵資料目録・図録の出版及びデジタルアーカイブ化による広報・普及事業

宮島学センターでは、平成21年4月の開所以来、宮島に関係する古文書、古典籍、絵図、錦絵、絵はがきなどを幅広く収集してきました。

今年度は、宮島学センターが所蔵するこれらの資料の高精細な写真を撮影し、現在の状態をデータで保存することにしました。また、これらの写真データは、本学の教員や学生たちが研究に利用するだけでなく、近い将来デジタルアーカイブとして公開することを検討しています。



「六十余州名所図会 安芸 厳島祭礼之図」(歌川広重(初代)、嘉永6年(1853))

出前授業等

宮島学センターでは、廿日市市の小中学校を中心に、宮島学を講じる出前授業をおこなってきました。今年度は、次の2校で実施しました。

■廿日市市立野坂中学校

8月25日、同校の生徒144名が宮島で実施した研修において、宮島学センターの教員が宮島の歴史や文化について説明し、生徒たちの質問に応じました。

■AICJ中学校

10月11日、宮島学センターの教員が同校を訪

れ、「宮島の歴史と文化」を紹介する授業を実施しました。同校の生徒100名が参加し、授業の内容は宮島の観光マップ作りに活かされました。

平成30年度からは、センターが所蔵する資料(古文書や絵図等)を教材として、和布りテラシー、くずし字解読、絵図の読み方などをテーマとした高大連携公開講座や、高校への出前授業等を計画しています。

宮島学センターに資料を御寄贈いただきました

宮島学センターに資料を御寄贈いただきました。

□岩村 隆文さん

このたび、岩村隆文さんから、宮島盆・宮島彫りの貴重な作品などを御寄贈いただきました。厚く御礼を申し上げます。



椽盆(一尺八寸)



樽盆(二尺七寸)

編集後記

宮島学センター通信第9号をお届けします。

「宮島観光学入門(英語)」が全学共通教育科目として再スタートしました。このため、学生たちは1年次から学部・学科を問わず積極的に宮島に関わることができるようになりました。彼らがどのように成長していくか、楽しみにしています。

また、平成21・22年度、平成25年度～28年度に宮島学センター長を務められた秋山伸隆先生が、今年度で退職されます。先生には引き続きご指導をいただきたいと考えております。(0)

編集・発行

宮島学センター通信 第9号

平成30年3月15日発行

県立広島大学宮島学センター

〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号
TEL.082-251-9550

E-mail:miyajima@pu-hiroshima.ac.jp

ホームページ:

<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/soshiki/miyajima/>